

J A 御中
(営農担当部署)

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：J A全農ふくれん 担い手支援課)
(公印省略)

営農情報 14

暖冬に伴う麦類の栽培管理技術対策

今年の麦は、11月が少雨に経過したことから順調に播種され、出芽も平年並み～6日程度早かった。また、11月下旬～1月が高温（平年差：+1.2℃）に経過したため、麦の生育は旺盛で、7～10日程度早くなっている。

今後も暖冬傾向が続く場合、品種、播種期および地域によっては早期茎立ちにより凍霜害が発生する恐れがある。そこで、麦の収量安定のため、下記のような技術対策を実施する。

技術対策

(1) 排水対策

ほ場の湿潤状態が続いており、排水対策が重要である。ほ場に水が溜まらないよう排水溝の溝さらえを行い、排水口を整備して地表水を排水する。ほ場が乾燥した時点で、土入れを兼ねて作溝する。

(2) 土入れ・踏圧

土壌が乾燥した時点で速やかに土入れ・踏圧を実施する。

踏圧は、倒伏防止、早期茎立ち抑制のため、節間伸長開始期（踏圧の晩限：草丈20～25cm程度）までに実施する。節間伸長開始期は、播種期や地域により差が大きいので、現地の状況をみて判断する。

土入れは、倒伏防止や雑草防除の効果が高いため、3月上旬までに2～3回実施する。

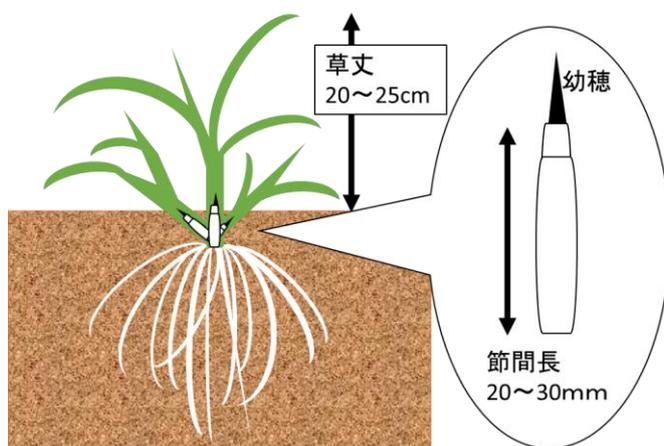


図 茎立ち期（節間伸長開始期）の目安

(3) 雑草防除

雑草の発生量はやや多い。雑草の草種や発生状況を観察し、茎葉処理除草剤を適期に処理する。除草剤は普通作雑草防除の手引きを参照し、最新の登録情報を確認して使用する。

(4) 追肥

1回目の追肥（分けつ肥）を施用していない小麦・食料用大麦・裸麦では、基準量を速やかに施用する。ビール大麦は2月中旬までに基準量を施用する。

2回目の追肥（穂肥）は、食料用大麦・裸麦では2月下旬、小麦では3月上旬に基準量を施用する。なお、葉色が低下した場合は、2回目の追肥を早める。

以上